電子カルテシステム導入事例

Empowered by Innovation

佐賀県立病院好生館 様

パッケージを活用して短期間で効率的な電子カルテの導入を実現

佐賀県立病院好生館 様

パッケージを活用して短期間で効率的な電子カルテの導入を実現

佐賀県立病院好生館は、ルーツをたどれば江戸の蘭学時代までさかのぼる歴史ある病院です。2007年4月に日常の診療を続けながらNECの電子カルテシステム「MegaOakHR」が稼働を開始しました。他社のオーダリングシステムからのリプレイスで、ベンダ決定から約7ヶ月という短期間での導入を実現しました。
佐賀県唯一の県立病院として、地域医療の要を担う同病院の「電子カルテシステムの導入から運用まで」を取材しました。

佐賀県民の医療を担う由緒正しき中核病院

好生館のルーツは、1834（天保5）年に佐賀藩主鍋島直正（閑叟）公によって創設された『医学館』にあります。1858（安政5）年に現在地に移転して『好生館』と称されるようになり、1896（明治29）年に現在の佐賀県立病院好生館となりました。河野仁志館長に、地域における好生館の役割をおうかがいしました。

※

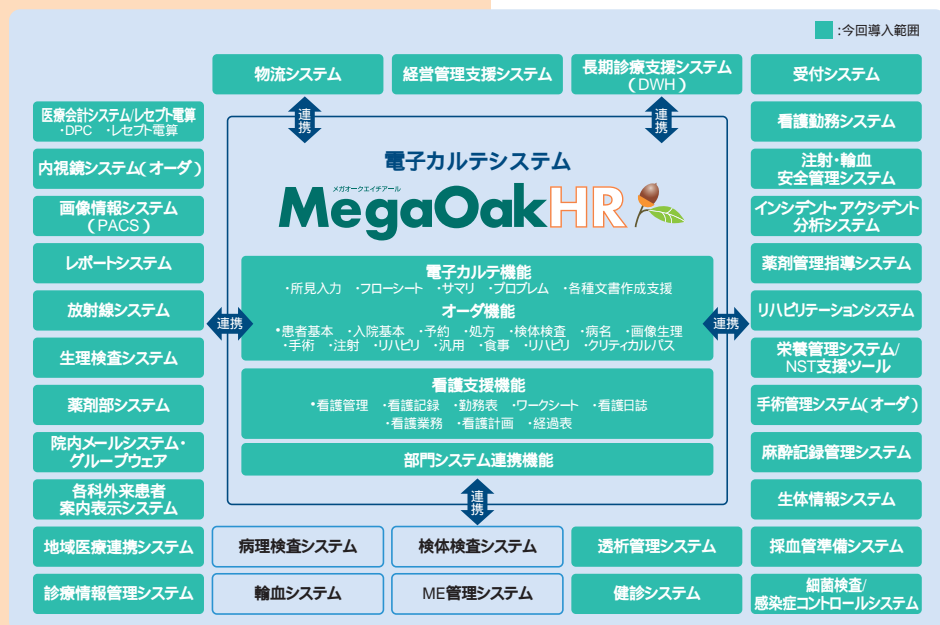
「佐賀県立病院好生館は、佐賀県の基幹施設として地域医療支援病院、佐賀県がん診療連携拠点病院などさまざまな役割を担い、県民のニーズに応えて高度な医療を提供しています。従来から、地域医療連携室を設けて地域完結型医療の確立を目指して積極的に取り組んできましたが、2007年にがん診療連携拠点病院に指定されたことを契機に地域医療連携室を発展的に解消し、相談支援センターとして発足させました。ここでは従来からの役割を引き継ぎつつ、がん診療の拠点として相談や情報提供、医療連携に取り組んでいます。好生館は、県民に信頼される急性期病院として、24時間の救命救急医療提供、基幹災害拠点病院としての役割などを果たしています。」

パッケージソリューションの採用で短納期での安定稼働を実現

河野館長は、電子カルテシステム導入の目的をつぎのように語っています。
「佐賀県民の医療の質の向上のためには時代に応じた設備投資が必要であり、電子カルテの導入もそのひとつです。今の時代は医療制度をはじめとして変化が激しいため、電子カルテシステムも時代や現場のニーズにあわせて使いやすいシステムを継続的に作り上げていって欲しいとお願いしました。NECの協力の下、短い導入期間でしたが無事稼働することができました。」

好生館の電子カルテ導入は、ベンダ決定から稼働まで7ヵ月という短期間のプロジェクトでした。システム導入で中心的な役割を担ったのが同病院の企画・経営室です。三浦直室長は、導入までの経緯をつぎのように語っています。
「オーダリングシステムの更新が必要になり、次期システムの検討を開始したのが、04年のことです。電子カルテ導入病院の見学やベンダによるデモ、コンサルティング会社によるヒアリングや問題点の洗い出しなどを行って検討を進めたところ、オーダリングシステ

佐賀県立病院好生館　導入システム概要

※佐賀藩主鍋島直正（閑叟）公は、伊東玄朴、楢林宗建等の建言を入れて牛痘の輸入を命じられました。楢林宗建は輸入した牛痘により我が子に種痘を行い、この成功を見た直正公は佐賀城内で大石良英に命じて世嗣子である淳一郎君に種痘をさせたのです。一連の種痘成功を見た直正公は、藩内に種痘を奨励し、その後の伊東玄朴らによる江戸「お玉が池種痘所」開所へとつながりる歴史的な出来事を記した絵です。

館長
河野 仁志 氏

事務長
福井 道雄 氏

企画・経営室 室長
三浦 直 氏

循環器科部長
林田 潔 氏

看護部長
深川 由久美 氏

ムだけでなく同時に電子カルテまで導入しても金額的に大きな差がないこと、次の新築移転に備えて紙を減らす必要性があることなどを考慮して、電子カルテの導入を決定しました。当初から導入期間や予算の関係で標準的なパッケージをノンカスタマイズで導入することを基本としていました。」

福井道雄事務長は、公立病院の電子カルテに求められる要件をつぎのように語ります。

「県立病院は、県民に対して常に安全で安心な医療を提供することが絶対的な使命です。システムに対して第一に求められることは、24時間365日確実に安定稼働することです。性能に重点を置き、外部委員を含めて総合評価方式で評価し、ベンダーを決定しました。」

「病院情報システムは、電子カルテを中心に20を超える部門システムがマルチベンダで構築されており、進捗管理やベンダ間の調整が重要なポイントでした。企画・経営室では、電子カルテについての院内ワーキンググループ（WG）の進行状況などは把握できましたが、部門システムは各部門で進められていたため、全体を管理するプロジェクトリーダーとして、NECの役割が重要でした。導入の最終段階では、多くの業務が集中して大変な時期もあったと思いますが、最後まで全体のコントロールをしていただきました。」（三浦室長）

企画・経営室を中心に、館内の協力体制で旧システムからのリプレイスを達成

今回の導入は、既存の施設で日常の診療を継続しながらシステムをリプレイスするというプロジェクトでした。

「導入体制は、医師2名を中心として看護師、コメディカルをメンバーに選定し、電子カルテは処方・注射など、部門・システムは各部門ごとにワーキンググループを立ち上げ、マスタの作成などの作業を行いました。最初にノンカスタマイズでの導入を宣言していましたので、製品に合わせて院内の業務フローを統一していくようにしました。時間に余裕がなかったこと、日常業務と平行に導入までの作業を進める必要があったことなどでして難易度は高かったのですが、館内の協力体制によって問題なく進めることができました。」（三浦室長）

企画・経営室は、館長直属の組織として院内の新規事業などを推進する部署です。電子カルテ導入も新規事業の一環として取り組みました。

「電子カルテは、医師の業務に関連する比率が高く、医師が導入の中心にならざるを得ません。しかし一方で、実際の業務フローに精通しているのは看護師であり、医師・看護師双方の連携が不可欠です。看護側の窓口や他の部門との調整役として、企画・経営室に看護部からスタッフが1名配属されたことは導入を作業すすめるうえで効果は大きかったですね。」（三浦室長）

電子カルテ導入における看護部の取り組みについて深川由久美看護部長はつぎのように語っています。

「電子カルテは、患者様中心の看護を行い、情報を共有化してチーム医療を実施するための不可欠なツールです。看護部としても導入には積極的に取り組みました。電子カルテ導入施設をいくつか見学し、これまでの紙カルテでの運用をノンカスタマイズの電子カルテに合わせることができるのか、最初は心配になりましたが、同時に業務の標準化やワークフローの見直しの必要性を感じました。しかも、これには看護部だけでなく医師やその他の部門との協力、連携

が必要でした。

そこでまず、看護部の中に電子カルテ委員会を作り各病棟から1名ずつ委員を集めてヒアリングや各病棟の業務のすり合わせなどの基本作業を行いました。ここでの内容を師長会や主任会にフィードバックし、標準化の作業と電子カルテ導入への情報伝達を行いました。また、企画・経営室に看護部代表のスタッフを1名置いて、看護部の窓口と同時にシステムや他部門との調整役となってもらいました。」

ダイナミックテンプレートや禁忌アイコンなど診療支援ツールを活用

稼働から約2ヵ月経った電子カルテの評価を、ユーザーの立場である循環器科の林田潔部長におうかがいしました。

「導入当初こそ、電子カルテの機能を把握できず入力に時間がかかっていたのですが、慣れるにしたがってDO処方や定型文など入力支援や省力化の機能を活用してスムーズに診療ができるようになりました。操作性やレスポンスを含め、全体としては当初の想定より問題なくスタートしたという印象です。」

佐賀県立病院好生館 様

電子カルテには、入力支援機能として診療科ごとにコンテンツを最適化したダイナミックテンプレートが組み込まれています。

「ダイナミックテンプレートでは、項目に沿って選択するだけで所見を作成できますが、テンプレートの活用度合いは診療科の特性や運用によって違いが出てくるでしょうね。私は今のところ多くの所見を直接キーボードで入力しています。若い医師は入力が早いため紙カルテの時よりも記事量は増えているようです。ただ、紙カルテでは、書くという行為は同時に考えるということでした。しかし電子カルテでは、入力が定型化されている部分が多いため、記事が多いことがそのまま質の向上に繋がっているのかどうかは、今後検証が必要ですね。」

好生館では、診察室の端末に電子カルテ用に開発された高精細電子カルテ液晶ディスプレイ「MultiSync for HR」が採用されており、林田部長は診療現場での評価をつぎのように語ります。

「診察室はディスプレイ2台が設置されていて、画面はきれいで見やすいですよ。循環器科では心臓の3D画像を確認したり、電子カルテで患者さんに説明していますが、通常の液晶ディスプレイよりもクリアで、患者さんの評判もいいですね。」

また、今回導入したNECの電子カルテシステム「MegaOakHR」では、基本画面のレイアウトが一新され、患者様の年齢や性別を反映したイラストや禁忌情報のアイコンを表示し、わかりやすく安全な医療の実現をサポートしています。

林田部長に電子カルテの課題と今後の方向性をおうかがいしました。

「ノンカスタマイズによる短期間での導入を行いましたが、カルテの機能や仕様と運用の間で詰め切れなかった部分があり、そこが課題として残っています。これは、今後すり合わせを行い、システムをそのまま利用できるところはうまく利用し、館内の運用を統一していく見直し作業が継続的に必要です。」

看護システムの導入とその運用について深川看護部長におうかがいしました。

「ノンカスタマイズが基本ということで、我々の従来の業務をどこまで整理し、標準化してシステムに落とし込むかという部分が課題でした。それまでも看護診断の標準的なものは作っていたのですが、それをさらにシステムの仕様や仕組みの中に入れ込むにはもう一段階の作業が必要でした。

電子カルテの効果としては、診療の場で正確かつ適切な情報を入力できますし、その情報を共有して活用できますので、転記などの負担が軽減されるのではと期待しています。看護業務では、ベッドサイドでとったメモを転記したり、業務後に看護日誌をまとめたり、書く行為に時間がかかっていました。その時間を患者さんのケアに振り向けることで患者さんの満足度を向上できればー番いいですね。」

経営支援、医療連携のツールとして電子カルテの進化に期待

河野館長は導入初期の電子カルテを「まずは日常診療の中で十分に使いこなしていくことが第一」としながら、今後の電子カルテへの期待をつぎのように語っています。

「病院運営という視点でいうと、DPCへのシステムの活用、レセプト電算化への対応などが挙げられますね。電子カルテに蓄積されたデータを使った解析や医事請求など、よりきめの細かい対応が可能になるでしょう。また、物流システムと連携して医療材料や薬品などの管理ができるようになれば、経営的なメリットも期待できます。診療面では、がん登録が簡単にできるような仕組みが組み込まれること、ネットワークを利用した地域連携システムへの展開などを期待しています。」

User Profile

名称:佐賀県立病院好生館
所在地:〒840-8571 佐賀市水ヶ江一丁目12番9号
病床数:541床
診療科目:18科(内科、外科、眼科、産婦人科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿器科、整形外科、放射線科、脳神経外科、精神神経科、麻酔科、循環器科、心臓血管外科、救命救急センター、人工透析室、緩和ケア科)
URL:http://www.koseikan.jp/

お問い合わせは、下記のNECへ

NEC 医療ソリューション事業部
www.megaoak.com
〒108-8420 東京都港区芝五丁目29番23号(明生田町ビル)
TEL.03(3456)6156(ダイヤルイン)

日本電気株式会社 〒108-8001 東京都港区芝五丁目7-1(NEC本社ビル)

PRINTED WITH SOY INK このカタログは、再生紙および環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

2007年7月現在